戦争で平和はつくれるか

アフガニスタンで1000本を目標に井戸を掘りつづける「ペシャワール会」の現地代表・中村哲医師。「人間にとって、本当に困ったときに必要なのは食べものです」（14ページ）

アフガニスタンの平和は「水」でしかつくれない

1000本の井戸を掘るペシャワール会・中村　哲さんに聞く

アフガニスタンで井戸掘りを続ける「ペシャワール会」現地代表の中村哲医師（福岡市出身）は「戦争どころではない。二年前からの大干ばつの方がずっと深刻だ」と警鐘を鳴らし続けている。

アフガニスタンは未曽有の大干ばつにみまわれ、一年間で一〇〇万人が餓死しており、その干ばつは、〝地球温暖化による初の犠牲〟ともいえるという。

その中村さんは、現在「より多くの人びとに実情を知ってもらいたい」と全国各地を駆け回って、報告会を開いている。二〇〇一年十一月二〇日は福岡県大野城市と福岡市の二会場で報告会があった。前者は「徳州会JAMSの会」の主催で約四〇〇人、後者は「アフガン難民を支援する福岡の会」の主催で約五〇〇人もの人びとが参加した。報告会とその後のインタビューで、中村さんはアフガニスタンの状況を次のように語った。

農民が九五%以上を占める「自給自足の農業国」

アフガニスタンの面積は日本の一・五～一・六倍。国土の大半はヒンズークシ山脈を中心とする山岳地帯です。典型的な砂漠気候で夏は摂氏五二度を記録する日もあるほど暑く、冬はマイナス一〇～二〇度がごく当たり前なほど寒いです。年間降水量は日本のわずか二〇〇分の一しかありません。人口は一二〇〇万人～二四〇〇万人まで諸説ありますが、真ん中をとって二〇〇〇万人前後というのが正しいところでしょう。国民の九五%以上は農民または遊牧民。アフガニスタンは自給自足の農村社会と小規模な遊牧社会が融合したような国なのです。

年間降水量が日本の二〇〇分の一しかないのになぜ自給自足の農耕生活ができるのか？　それは山の雪のおかげです。アフガニスタンには「お金がなくても生きていけるが、雪がなくては生きていけない」ということわざがあります。山に降り積もった雪と何千年もかけて蓄積された氷河こそがこの国の水源なのです。山の雪は夏に解け出して川をつくり、その川沿いに豊かな水田が拓かれ、農業が営まれています。

ラクダの背中に物資を乗せて運ぶ隊商は農村部でごく普通に見られる光景で、末端の物流は依然として隊商が担っています。シルクロードの時代から一〇〇〇年以上も変わらぬ暮らしを続けている地域もざらにある。国民の九九・九%はイスラム教徒で、イスラム世界の中でももっとも古典的なイスラム社会がそこにあります。モスクを中心とする地域共同体が集合してできあがっているのがアフガニスタンという国なのです。

福岡市の報告会で

帰国中は各地を奔走し、1日のうちに2、3カ所で報告会をひらくこともある

農村は戦場だった

一九七九年十二月に旧ソ連軍の侵攻によりアフガン戦争（一九七九～一九九二年）が勃発してから今に至るまで、この国はずっと内戦の余韻を引きずってきました。農村は戦場となり、一般の農民がゲリラとなって銃を手に戦ったのです。アフガン戦争の犠牲者は戦闘員だけで八〇万人、難民として逃げる途中に命を落とした民間人

を合わせると二〇〇万人にも上ると言われています。共産政権下では〝農村は封建制の象徴〟とみなされ、村ごと抹殺されたケースもめずらしくありません。六〇〇万人の人びとが難民となり、ペシャワールを中心とするパキスタンの北西辺境州に逃れました。

アフガニスタンはハンセン病患者の多い国です。患者のほとんどは山の中の無医地区の人びとで、そこは他の感染症の巣窟でもあります。こういう地域で医療活動を行なうのが私たちペシャワール会の目的なのですが、内戦の最中、戦場である農村に赴くことはできません。そこで私たちは「国境に近いパキスタンのペシャワールで医療活動をしながら人材を育て、内戦が下火になったらアフガニスタンに入って貧しい山村部に病院を開設しよう」という方針を立て、一九八四年、ペシャワールでの医療活動を開始しました。

一九八八年、旧ソ連軍は撤退。このとき〝旧ソ連軍がいなくなったら難民もアフガニスタンに帰るだろう〟という誤った予測の下、世界中の援助団体が難民キャンプに押しかけ、各国から拠出された二〇〇億ドルもの援助金を使って派手な援助活動を展開しました。しかし内戦はさらに激化するばかりで、一人の難民も帰還しませんでした。一九九一年に湾岸戦争が始まると欧米の援助団体は身の危険を感じて先を争うように撤退しましたが、私たちは現地で医療活動を続けました。

ソ連崩壊後、農村に人びとが戻り、田畑がよみがえった

旧ソ連が崩壊してアフガニスタンの共産政権が潰れると、国内の各勢力は主導権争いのためいっせいに首都カブールをめざしました。今度は都市が内戦の戦場になり、農村には平和が戻ったのです。難民キャンプに避難していた人びとはこの状況を見抜き、自発的に農村への帰還を始めました。一九九二年五月から十二月にかけて、二〇〇万人の人びとが外国の援助に頼ることなく自力でアフガニスタンに帰ったのです。

私たちは人びとの自発的帰郷を待ちかまえ、農村部に診療所を開設しました。一三年間に及ぶ内戦の戦場となっていた農村は、家々が崩れ、田畑も荒れて、とてもひどいありさまでした。人間にとって、本当に困ったときに必要なのは食べものです。紙幣は薪の代わりにしかなりません。しかもアフガニスタンは農業国。私たちは「農業生産を上げることでしかアフガニスタンは救えない」と、農業復興を側面から援助するかたちで活動を加速させました。人びとはせっせと田畑を耕し、みるみるうちにあちこちの水田や畑に緑が戻りました。一〇年以上も村を離れていた人びとがやっと帰郷して農村を復興させた。それに立ち合えたのは私にとって心から嬉しいことでした。

ペシャワール会は現在、アフガニスタンとパキスタンに一病院と一〇の診療所をもち、年間約一八万～二〇万人の診療にあたっています。カブールに診療所を増設したので、今年はさらに五万人くらい増えそうです。働いているのは現地スタッフ二二〇人と日本人ワーカー五人。アフガニスタン国内で今も医療活動を続けているのはペシャワール会の診療所だけです。これらの活動を支えてくださっているのは日本のみなさんの募金です。福岡市にある事務局はボランティアの市民らが手弁当で運営しています。

温暖化による大干ばつで約一〇〇万人が餓死

二〇〇〇年夏、未曾有の大干ばつがユーラシア大陸を襲いました。中央アジアを中心に六〇〇〇万人が被害を受け、アフガニスタンだけでも一二〇〇万人が被災。この一二〇〇万人のうち「四〇〇万人前後は飢餓線上にあり、一〇〇万人前後は餓死線上にある」とWHO（世界保健機関）は同年六月から世界中に警告を流し続けました。

アフガニスタンでもっとも大きな河川の一つであるカブール川は歩いて渡ることができるほど水量が激減。地球温暖化のために冬の積雪量が減り、しかも早く解けるようになったことが原因です。二〇〇〇万人の国民を養ってきたヒンズークシ山脈の雪と氷河という巨大な貯水槽が枯渇しつつある。これは恐るべき状況です。作物の収量はゼロに近づき、飲み水が底を尽きました。

アフガニスタンの山岳地帯で診療する中村さん（以下、現地写真はすべてペシャワール会提供）

水が無くなると衛生状態が悪くなり、各地で赤痢が大流行しました。赤痢で死にかけた子どもを抱いた若い母親が、私たちの診療所の外来に列をなすのが珍しくなくなるほど事態は深刻で、無医地区から何日もかけて歩いて来た人も少なくありません。死にかけた子どもを抱いて呆然と立ち尽くしていた母親の姿が、私は今も忘れられません。

〝餓死〟というのはお腹がすいてば

ったり倒れるのではなく、栄養失調で体力が弱ったところに感染症などの病気にかかり、死んでしまうのです。真っ先に犠牲になるのは子どもやお年寄りです。この大干ばつのためアフガニスタンでは二〇〇〇年夏からの一年間に一〇〇万人が亡くなったと言ってもけっして誇張した数字ではありません。治療する以前に、いのちをつなぐ水と食べものがない。「とにかく生きておんなさい！　病気は後で治すから」と言わざるをえないような、悲惨きわまりない状況でした。

飲み水がないと家畜も死んでしまう。そうなる前に農民たちは続々と村を捨てて大都市へ移動し始め、私たちの診療所の周囲にも廃村が広がりました。実際、一〇〇万都市カブールの人口のほとんどは、大干ばつのため山村から逃れてきた貧しい人びとです。大都市に溢れた避難民はやがて難民となって、パキスタンへ流出することになります。

村人を総動員して井戸掘りを開始

こうした状況に一刻も早く歯止めをかけなければなりません。「村の男たちを総動員して井戸を掘ろう」と私たちは二〇〇〇年六月、アフガニスタン東部のジャララバードに水源確保事業事務所を設け、アフガニスタン全域で水事情の実態調査と井戸掘りを始めました。一本の井戸水があれば何千人もの生命を救えます。「一年間で一〇〇〇本の井戸を掘ろう」と目標を立て、日本人の若者たちがアフガニスタン人スタッフ約七〇〇人の陣頭に立ち、村人を総動員して全力で井戸を掘り続けてきました。既存の井戸の修復やカレーズ（山麓の地下水を水平に導き出す地下用水路）の復旧も手がけました。

私たちの井戸掘りは手掘りです。この一年間、さまざまな試行錯誤を繰り返して会得した独自の技術があり、機械で掘るより効率がよい。井戸枠も自前で作ります。落石や地下ガスに細心の注意を払いながら、六十数mぐらいの深さも手で掘るのですが、掘り進むうちに自動車ぐらい大きな石にぶつかることもしばしばです。これは手に負えません。そんなときどうするか？

じつは私たちの現地職員には、アフ

伝統的な井戸掘りの方法

ペシャワール会が改良、指導した方法

井戸の点検をするスタッフ

完成を喜ぶ子どもたち

ガン戦争でゲリラとして戦った人も多く、爆発物の取り扱いにも慣れています。アフガニスタンには今も一〇〇〇万発の地雷が埋められているといわれていますが、井戸掘りで大きな石にぶつかったとき、彼らがどこからともなく地雷を見つけてきて、その中に詰められている火薬を取り出し、発破をかけるのです。

井戸掘りの苦労はたくさんありますが、井戸があるからこそ集落を維持できます。みんなで力を合わせて井戸を掘り、水が出ると、村の人たちは「これで安心して村にいられる！」と心の底から喜んでくれます。人びとの喜ぶ顔に励まされて私たちは作業地を拡大してきました。

私たちの井戸掘りはウサギのような瞬発力はありませんが、亀のように着実で、掘って水の出なかった井戸はほとんどありません。二〇〇〇年七月か

ら二〇〇一年十月までに六二六カ所で井戸を掘り、このうち五五〇カ所で飲み水を確保できました。地下の水源そのものが枯渇の危機にあり、水位はどんどん下がっているので〝掘っては枯れ、掘っては枯れ〟という状況ですが、それでも二五万～三〇万人の難民化を阻止してきました。

東部のダラエ・ヌール渓谷では三六カ所のカレーズの復旧に取り組み、このうち三〇カ所前後に水が戻りました。いったんは難民化して村を離れた一万五〇〇〇人以上の農民たちが再び村に戻り、大干ばつで砂漠化した農地にカレーズから灌漑用水を引いて麦やトウモロコシを植え、以前と同じ自給自足の生活を営めるようになったのです。これは奇跡的なことでした。

水くみをする子どもたち

バーミヤンの仏跡破壊はなぜ起きたのか？

現地で井戸掘りを続けながら、私たちは「これだけの大干ばつが世界的話題にならないはずはない。世界中から救援の手が差し伸べられるだろう」と思っていました。ところが〝テロ支援国家〟とみなされたアフガニスタンに対して行なわれたのは救援ではなく経済制裁でした。二〇〇一年一月に発動された国連の経済制裁の品目には当初、食糧が含まれていました。飢餓に瀕した国に対して食糧の輸入を凍結しようしたのです。この決議に日本も賛成したことが私には大きなショックでした。

二〇〇一年三月にタリバン政権が行なったバーミヤンの仏跡破壊は世界中の非難を浴びました。でも彼らにとってあれは雨乞いの儀式という要素もあったのです。〝この大干ばつを起こしたのはわれわれ自身の道徳が壊れたからだ〟と考えたタリバンの、より原理的な人たちが、偶像を破壊して自分たちの身を清めることで神の許しを乞い、雨乞いしようとしたというのが実際のところではなかったかと思います。

国連制裁によって各国の援助団体がアフガニスタンを去り、首都カブールは無医地区になってしまいました。このため私たちは二〇〇一年三月、カブール市内の五カ所に診療所を開設しました。米国同時多発テロに報復する米軍の爆撃があっても、北部同盟がカブールに入ってきても、これらの診療所では何事もなかったかのようにアフガニスタン人スタッフによって診療が続けられています。現地の人びとは本当に勇敢です。

「アフガンいのちの基金」

現在カブールにいる一〇〇万～一五〇万の人びとのうち約三〇～四〇％は慢性の飢餓状態にあり、一〇％前後の人びとは餓死線上にあると推測されます。ペシャワール会では二〇〇一年十月から「アフガンいのちの基金」として募金への協力を呼び掛け、寄せられたお金をもとに緊急食糧支援を始めました。直ちに餓死に直面すると推測される一〇万人（約一万家族）を対象に小麦粉と食用油を配っています。

日本円で二〇〇〇円あれば一家族（一〇人）の一カ月分の食糧を賄えるのです。寄せられたお金はこれまでに二億五〇〇〇万円を超えました（二〇〇一年十一月現在）。すでに一四〇〇トンの食糧を搬入、九八七トンが餓死寸前のカブール市民に配られました。これで生命を救われた人びともたくさんいます。井戸掘りも続けています。

いちばん大切なのは、新たな難民を出さないことです。そのためには国内支援が不可欠。今のアフガニスタンは日本人が入れる状況ではなく、私どもの日本人スタッフもペシャワールで待機しています。しかし混乱状態が収まると同時に現地に戻り、「いのちの基金」で集まったお金を投入して最大限支援していきます。アフガニスタンに緑の田畑を復活させ、人びとが自給自足の暮らしを取り戻すための支援に全力を挙げます。水源確保事業も拡大します。

日本人であればこそ

アフガニスタンは世界でもっとも親日的な国です。彼らは日本人を外国人と思っていません。どんな山奥に行っても皆、日露戦争とヒロシマ・ナガサキを知っています。「日本は五〇年以上も戦争をしていない。すごい国だ」と尊敬してくれます。

日本人であるがゆえにいのち拾いし、日本人であるがゆえにプロジェクトが進めやすかったという経験が私たちには多々あります。欧米の援助団体が逃げ帰った湾岸戦争の最中にペシャワール会が現地で医療活動を続けられたのも、日本人であればこそでした。

アフガニスタンだけでなく、中東世界全体が日本に対して抱いている「平和な国」というよいイメージを大切にしないと、日本の安全や平和そのものが脅かされてしまいます。

人間には何が大切かを教えてくれる

ペシャワール会の一八年間の活動をふり返ると、「私たちは助けたのでは

なく、助けられてきたなあ」と思います。飢えに直面している子どもたちは〝こんな写真を皆さんに見せたら募金が集まらないな〟と思うほどいきいきとした明るい顔をしています。寄金する側の日本人の方がよっぽど表情が暗い。

アフガニスタンの人びとは世の中の動きに惑わされない、人間らしいどしっとしたものをもっています。「人間っていうものは何とかなるもんだ」という楽観的なものの見方や、極限状態に置かれたとき人間が本当に失ってはいけないもの、失ってもいいもの、生命の大切さ……いろんなことを私は現地で学ばせてもらいました。

アフガニスタンは農業で成り立っている国です。それは人間にとってもっとも本質的な活動をしている国だとも言えます。農村は基本的に読み書きのいらない社会です。読み書きを教育の基準にする社会がはたしてよいのかどうか、私は疑問に思います。読み書きができるようになると人びとは農村を捨て、都市に流れてしまうでしょう。でも都市にはこれを受け入れる余裕がない。

「それで食べていくこと」を身に付けるのが教育だとすれば、家の手伝いそのものが職業を得る道につながります。道徳的な教えは彼らが週一回モスクで聴いている説教やコーランからも学べます。私たちはアフガニスタンの教育問題を論じる前に「そもそも教育とは何か？」ということを本質的に考える必要があります。この際私たちの社会自体が「教育力」というものを根源的に見直すべきではないでしょうか。

今の日本がこれだけ浮薄な国になりつつあるのは、農業がなくなってきているからです。地についた自然とのふれあいがないからです。自然についての解説書はたくさんあっても、実際にメダカを手にしたり、イモムシやアメンボウを見たことのある人がどれだけいるでしょうか。日本全体が商業という人類にとってはいちばん上澄みの経済活動で生きており、作っては消費し、作っては消費することを繰り返さないと成り立たない社会になってしまっている。反対にアフガニスタンはむやみに消費するのはよくない社会です。

「人間にとって大切なことは何か」を考えるとき、アフガニスタンは「教育」や「人が生きていくための経済」「人と人との助け合い」などいろいろな材料を提供してくれます。

平和な家庭生活、水と食べもの――これがアフガニスタンの人びとの願いのすべてです。

《インタビューより》

―アフガニスタンの農業は具体的にはどのようなものですか？

中村　日本とだいたい似たようなものです。主食は小麦で、水の豊富な夏に米を育て、冬は小麦をつくる。野菜も

2000年9月　アフガニスタン、ダラエ・ヌール渓谷。干ばつにより、緑はない

2001年2月　アフガニスタン、同地。地下水路修復、畑に緑が戻る

日本と同じようなものがあります。オアシス的な農業というか、全部が乾燥地というわけではなく、川沿いや谷間など水のあるところは豊富にあるので水田耕作も可能で、川の周囲に拓かれた棚田や段々畑がかなり多いですね。水をいかに引くかが現地の農業の鍵を握っています。

農村では牛を飼い、牛に田んぼを耕させます。糞は田畑の肥やしとなる。昔の日本とまったく同じ循環型農業ですよ。牧畜は半農半牧の生活をしている人たちと、ヒツジを飼いながら移動生活をする遊牧民とに分かれます。いずれにしてもヒツジの肉は貴重品で、いつも口にできるものではありません。

それから果物が豊富で本当においしい。栽培したのではなく自然に成るがゆえのおいしさです。それぞれの家庭が自分たちの大事な果物の木を持っていますね。

―売るための農業とは違うのですね。

中村　原則として農村地帯はどこも自給自足です。地域によっては貨幣経済そのものがないところもある。私たちの診療所のまわりもそうでしたが、物々交換です。ローソクが欲しいときはクルミやブドウなど自然にあるものと交換する。採集経済に近いものがある。現地の人びとはおしなべて要求水準が高くないので、灯りといってもローソクかせいぜい中国製のランプで事足りる。それをよそから持ってくる以外は自給自足で暮らしています。

それぞれの家族がそういう生活をしながらそこそこ暮らしていける。そういう農村が国中に広がっているのが、旧ソ連軍侵攻前のアフガニスタンでした。このころにアフガニスタンを訪れた人はものすごくよい印象を抱いていますよ。ただ部族同士の対立は昔から激しいところですが。

―農地に地雷の危険はないのですか？

中村　耕作可能なところでは地雷の撤去はすべて終わっています。その大部分は住民たちが自分たちで撤去しました。ヤギを先に歩かせたりしてね。

—大干ばつ以降のアフガニスタンで農耕生活を営めている人はどれぐらいいますか？

中村　詳しい数字は分かりません。地域によって状況が異なりますから。上流域の干ばつはそれほど深刻ではありませんが、下流の平野部に近い所はダメージが大きい。言い換えると、昔から自給自足で「自分のところで食べる分は賄えるが、穀物をよそに出すゆとりはない」という地域は従来どおりの農耕生活を続けられているけれど、都市に穀物や野菜などを供給していた平野部の干ばつがものすごいです。こういう地域が都市に食べものを供給する余力がなくなってきた。都市部も飢えるし、本人たちも飢えようとしている。

—より多くの井戸を掘り、水源を確保すれば問題は解決するのですか？

中村　井戸掘りによって水がよみがえってきたのはごく一部の恵まれたところです。カレーズの水がまだ豊富だったりとか、そういうところですね。何千年もかけて蓄積された地下水自体が枯渇したときは、また砂漠化するでしょう。

今の状況がこのまま続けば、仮に全人口の半分と仮定してもアフガニスタンだけで一〇〇〇万人の人びとが水源の枯渇によって居住空間を失い、必然的に国外に出て行かざるをえなくなるでしょう。そうなると、たんに人が移動するということにとどまらず、さまざまな悲劇も起こりうる。政治的混乱もあるでしょうし。これは大変なことです。〝どの勢力がアフガニスタンの権力を握る〟とかそういうレベルの問題を議論している場合ではありません。これはある意味で戦争よりも恐ろしいのだから。

私たちのやっている井戸掘りも長い目で見れば一時期の方策にすぎません。地球温暖化の解決なしにアフガニスタンの大干ばつも砂漠化も解決しませんから。ただ国土の全部が砂漠化するわけではなくて、一部川沿いの地域には水が残り、そこを中心に細々と農業が続いていくのではないでしょうか。また地球が冷えてくれば話は別ですが。

—私たち日本人はアフガニスタンの人びとのために何ができるでしょうか？

中村　アフガニスタンの人びとにとっては自分の国でもう一度自給自足の農耕生活ができることが一番の幸せなんです。それを大干ばつが妨げている。砂漠化を防ぐために日本人に何ができるか簡単には分かりませんが、そういう「少しでも防ごう」という努力が何かを生み出していくのではないかと思います。たとえその成果が何十年か後に結果的にだめになるとしても、努力

することは必ず何かを生み出すと思う。

—地球温暖化は本当に深刻なのですね。

中村　地球温暖化が二酸化炭素のせいかどうか私は知りませんが、今の全世界での工業化や産業化が続く限り起き得る現象でしょう。今、直接的にはアフガニスタンや中央アジアの人びとがその被害者ですが、やがてツケは他の地域にも回ってくる。それはテロというツケであったり、難民が押し寄せてくるというツケであったり、いろいろだと思います。米国同時多発テロと大干ばつによる飢餓は直接関係ないと思いますが、アメリカが地球温暖化防止のための京都議定書に参加しないのは歯がゆいですね。

私は〝グローバル化〟というのはあり得ないと思うんです。温暖化などによって状況が追いつめられていくと、日本でも「やっぱり熊本の五家荘のような山奥に住もうか」という動きが必ず出てくるでしょう。それに今の国際的な金融資本体制が崩れれば先進国の多くの人びとは職を失いかねない。これらは戦後の飢餓を体験した人間にとっては何でもないことなんですが、これだけ国が豊かになると〝失いたくない〟という防衛心が過剰になってしまいますからねえ。「最低限、水と食べものがあれば怖くない」ということに皆が気づくまでに、納得のいく説明やプロセスが必要です。

最終的には私たちも自給自足の農業社会にならざるを得ないのではないか。アフガニスタンの飢餓を目の当たりにしている私にはそう思えます。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

中村さんは〝熱血漢〟というより、温厚で飄々とした雰囲気の方だ。報告会の参加者から「なぜ危険な場所にあえて行き、人びとを助けるのですか？」と質問されたとき、「一言で言うと、〝大和魂〟です。私は日本人としての誇りや道徳観で自然に動いているだけです。自分がやればできると思うときに手を引くなというピシッとした気持ちが私の中にあります」と答えておられたのがとても印象的だった。

平和の原点は人と人との助け合い。そして、自分たちの食糧を自分たちの土地で賄える地に足のついた生活こそが、ゆるぎない平和の基盤なのだ—中村さんのお話をうかがいながら、そのことに気づかされた。

■ペシャワール会事務局　福岡市中央区大名一－一〇－二五　上村第二ビル三〇七号　電話〇九二－七三一－二三七二、ファクス〇九二－七三一－二三七三　ホームページ http://www1m.mesh.ne.jp/~peshawar/

■中村さんの近著『医者井戸を掘る アフガン旱魃との闘い』（税別一八〇〇円）の問合先は石風社（電話〇九二－七一四－四八三八、ファクス〇九二－七二五－三四四〇）

（竹島真理　フリー記者）